5.99の世界

澄永　香久子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
５．９９の世界

【Ｎコード】
Ｎ５６６３Ｕ

【作者名】
澄永　香久子

【あらすじ】
私は同級生と結婚し、穏やかな生活を送っています。
昔からの友人であり、ソウルメイトの桐子さんが、今、突然私に冷たくなりました。このことは、この事件の発端なのです。
この後、予想もしない展開になります。
精神科医の桐子さんは、私に関する秘密を知っているようです。
６の世界から、０．０１ずれた５．９９の世界に住む私は、これからどうなるのでしょう。その謎は、ラストシーンでわかります。いくつもの点在するヒントが、パズルを解くように、進んでいきます。

この世は、パラレルです。私は、５．９９の世界から、戻れるのでしょうか。

1.　突然冷たくなった友（前書き）

わかりにくいかもしれませんが、最後に驚きますよ。

1.　突然冷たくなった友

　時々、夜中に、光が飛んでいる。
ここは、もしかして、現実ではないのかもしれない。
私は、監禁されているわけではない。
夫と二人で、簡素な一軒家に住んでいる。
子供はいない。
できなかった。
それなのに、私の部屋だけが、閉ざされた空間のように、
時空を超えている気がする。
そして、現実とのうねりの中で、ちょうどいい具合に、
私はバランスをとっている。
夫といる時、食事を取る間の会話の中、私は現実に戻される。
夫とのたわいもない会話に、けらけら笑い、不倫ドラマを見て、けちをつける。
その状態を、心から楽しんだ後、私は自室に戻って、自分のスイッチをオフにする。
手を合わせて、祈る。
誰も来ないように、ふすまをぴったり閉め、薄暗い部屋の中で、
私は集中する。
キーンと音がするように、空気が張り詰めてくる。
意識が、意識が、私を無にしてくれる。
その力は強く、そのまま続けていると、後ろに倒れるんじゃないか、と
思うときがある。
この状態になるまで、何回、般若心経を唱えたのだろう。
１５年前、私は何も知らない子供のような奥さんだった。
外で、クラクションが鳴ると、おびえ、すぐに夫を呼んだ。
私が般若心経を唱えるようになったのは、夫のすすめだった。

あまりにも、頼りない奥さんだった。
初めて唱えたとき、頭の中で、太鼓の音が鳴り続けた。

私は好きな人とはしない。
相手がどうでもいい奴ならば、こちらも、どうでもいい対応をする。
この私に、この私に、思いを寄せる男のことを憎んだ。
人を好きになるということが、嫌いだった。
思いを募らせる。
これほど馬鹿げたことはない。
好きで好きでたまらない、なんていうのは馬鹿の極地だ。
私のことを少しだけ好きでいてくれる、距離感のある人が好きだ。
本当に人を好きになるということは、好きになった自分を愛することではない。
それは本当の愛ではないからだ。

始めは、寝る前に、般若心経を唱えてから、寝ることにしていた。
松原泰道先生の本を、１５年間唱えている。
暗記できるようになったのは、それから随分たってからだった。
最初は、完璧に唱えられないと、また最初に戻ってから唱えていた。
そんな日々が続いた。
心の中では暗記しているつもりだが、今は、お祈りをする時は、本を両手で持ってする。
力を込めすぎてはいけない気がした。
この結婚は、ソウルメイトの桐子さんが、もたらせてくれた。
同級生の聡明な女性。
私たちは、自然に、何の引っ掛かりもなく、１年後に結婚した。
夫も同級生である。
そのソウルメイトの桐子さんは、どういうわけか、最近私を避けるようになった。
電話をしても、冷たい声になった。

ソウルメイトと思っていたのは、どうやら私だけだったようだ。
いや１５年前は、そうだったのかもしれない。
この１５年の間、いろんな状況が変わってしまったのだ。
彼女の冷たい声は、私に大きな不安を与えた。
桐子さんに言ってないことがある。
中学生の頃、彼女と恋仲だった中田君と、成人してから、何度も会うようになった。
淡い、淡い、友達以上、恋人未満のそんな感じだった。
中田君はハンサムで、背が高く、俳優になれそうな風貌をしていた。
同じように背の高い私とは、不釣合いだった。
中田君の親友だった、後に私の夫になる吉塚君が、私のことを気にしていると、
そればかり言っていたが、私と桐子さんと中田君と吉塚君は、不思議な仲間だった。
と言っても、４人で会ったことはない。
桐子さんと中田君が、たまたま離れていた数年間を、私と吉塚君とで、会っていたのだ。
何であの時期だけ、私達は、お酒を飲みに行ったりしたんだろう。
私は、何もいけないことをしたわけではない。
その話を、桐子さんが知って、怒っているのか、そんな単純なことではない気もした。
中田君と吉塚君と私は、まるで、ドリカムのような関係だった。外から見れば。
桐子さんが何を思っているのか、彼女の仕事と関係あるのか、それはわからない。
彼女は、精神科医である。
その前に。私の過去において、書いておくべき話がある。

その男は、Ｏという。職場の同僚である。
私達は不動産会社で働いていた。

社長が、すべての実権を握っているようなワンマン会社だ。
Oは、社長に気に入られて、よく行動を共にしていた。
手に入れたい土地があると、Oを連れて、よく見に行った。どんな田舎にも。
大体欲しいのは、新興住宅地に欲しいような田舎の土地だった。
私も、なぜか連れられて、一度一緒に車で行ったことがある。
山道を随分走ったのを、覚えている。
Oは、他の同僚達に、私の話をするようになった。大体が仕事中だった。
「今日のストッキングは、どぶねずみ色だ」
とか、
私がお茶を入れて、全員の机の上に置いたのに、自分のだけない、と大騒ぎした。
Oは、人騒がせで、自己中心的で、みんなを惑わせた。
私は、会社に行くのが嫌になった。
Oは、私のことが好きなのではなく、自分が大好きな人間だった。
それはわかっていても、だんだん私の心は、重くなった。
私の9月の誕生日に、プレゼントをやると、Oはみんなの前で公言していた。
私にも聞こえるようにに言うなんて、Oは自己愛型の恋愛体質なのだ。
誕生日の日が来た。私は朝から緊張していたが、できるだけ普通を装った。
もし告白してくれるのなら、うぶな私は、会社をやめて、つきあってもいいと思った。
初めて、私に好意を持ってくれた人だったからだ。
多少人騒がせでも、付き合いだしたら、会社で私の話をすることもないだろう、とうかつにも
思ってしまった。
その日一日は、何も起こらなかった。

私は退社する時、少しホッとした。いつものように駐車場まで歩き、
自分の車に乗って帰った。
何もなかった。
プレゼントもくれなかった。
あれほど会社で言っていたことは、嘘だったのか。
私は、少し落胆したが、心は軽くなった。
明日から、普通に会社で仕事ができる。
その日は、ぐっすり眠れた。
次の日、会社へ行くと、同僚達が、私を盗み見ているのに気づいた。
Oは、時間になっても現れず、私は、どうしたのだろうと心配になってきた。
隣の席の同期のお男の子が、
「どうして逃げたりしたの？」
と午後になって、ボソッと聞いてきた。
「何が、えっ、何のこと」
私の動悸が早まった。
昨日、Oはプレゼントを抱え、私を待っていたらしい。
私は全然気づかなかった。
逃げた、というのも嘘だ。
もしかしたら、車まで、小走りになっていたかもしれない。
それをOを無視して、逃げて帰った、という話になっていた。
私はまたまた心が重くなった。
欠席しているOの机をじっと見て、なんてずるい人なんだろうか、
と思った。
それにそのくらいで会社を休むなんて、デリケートすぎるというか、
男と女が
逆転しているんじゃないかと思った。
状況はさらに悪くなった。
Oは、告白できない気の弱さを全部私のせいにして、次の日から、
私の悪口を

言うようになった。
「パチンコ屋の男と付き合っている」
そんな噂まで流した。
そして、耐えられなくなって、私は会社を辞めた。
Oは、私から見ると、勝手で、気が弱く、ずるい人なのだが、なぜか社長から信用を得ていた。
この世なんて、こういうものなのか。
人の評価なんて、こういうものなのか。
私は一つ賢くなった気がした。
しばらく何もせず家にいた。
両親は、特別何も言わなかったが、２５歳になっていた私に、お見合いの話が
いくつかあった。
２人の人と会ったが、私は打ち解けるのが下手で、笑いもしないので、盛り上がらなかった。

2．　NKの日

桐子さんが、精神科医になった頃だ。
相変わらず、中田君とのことは、彼女に話していなかった。
話題は、いつもつOのことだった。
「世の中には、こんなに嫌な男がいるのよ」
私はそれを強調しながら、桐子さんの痩せた細い指を、いつも見た。
この人も医学生の道をたどったのか。
こんなに細い指で、死体をなぞったのか。
美しい桐子さんの横顔を眺めるたびに、医者とは似つかわない風貌だと思った。
私が結婚したのは、２９歳の時だった。
あれから3年後だ。

この3年間の間に、何があったのか。
それを書かずに、この話は終われません。
私は好きな人とはしないと書きました。
大体からして、この世に肉欲なるものがどうしてあるのか、全く理解できません。
できるなら、そういうものが地球上からなくなり、子供は、生植医療だけで生まれるようになったらいいのに、と私は考えていました。
私は特別な存在であり、私に興味や好意を持ったり、ましてや、声をかけてくる男は、殺してやりたいと思いました。
私が男の人と寝るのは復讐なのです。
この私に声をかけてくるなんて許せない。
馬鹿な男だと思いながら、抱かれるたびに快感を得ました。
３年間の間に、４人の男と関係を持ちました。
もちろん、その3年の始まりまで、私は、男の人を知りませんでした。

ＮＫの日。
あの日を境に、私は次の世界に入ってしまった感じがします。
６の世界は終わりました。地球は、５の世界になったのです。
そして、４，３，２，１，０の世界まで地球が進化すれば、地球はワープします。
本当のことを言うと、あの日の次の日から、地球がワープしたと、本気でそう思いました。
テレビに出てくるアナウンサー、テレビ番組も、みんな新しくなったのを、この目でしっかり見ました。ユーミンの夕方のラジオもありませんでした。
すべてが死に、新しい世界がやってきたと本気で実感しました。
実は、違っていたのです。
私は、あの時点から、０．０１次元の違う世界に入り込んでいたのです。
あの次の日、私は写真を撮りに、車を飛ばして、山の近くの公園に行きました。
私はよき夫に恵まれましたが、どういうわけか子供には恵まれませんでした。
２６歳からの３年間の罰が当たったのだと思いました。
吉塚君は、子供がいなくても、僕達はこんなに幸せじゃないかと、慰めてくれました。
不妊治療するほどの思いはありませんでした。
二人でこれからも静かに暮らしていきたいと思います。
私を復讐の世界から救ってくれた吉塚君、私の夫へも、子供のことでは申し訳ない気持ちで一杯です。
　公園の駐車場に、白い汚い軽トラックが、止まっていました。
エンジンをかけたまま、車体はブルブル震えて音を立てていました。
運転席に、薄汚い痩せた３０歳くらいの男が、それは不自然のごとく、乗っていました。

普通ならば、前を人が通れば、視線が動くはずです。
しかし、その男は、ただ前方を凝視しているだけです。
あっ、情報屋だ。
私はそう思いました。
どこの国の人だか、すぐわかりましたが、ここにはそれは書きません。

私は、あの日から、０．０１次元の違う世界に入ったのです。
家の近くの事務所の入り口に、古代人が２人立っていました。
珍しいものでも見る目つきで、私のほうを見つめていました。
動物の皮でできた服をまとった古代人です。
軽トラックの男も、古代人も、私を緊張させることはありませんでした。
私はあくまで冷静でした。
ただ、ラジオや、テレビが私を混乱させました。
あの日とは、人生を切り替えるポイントだったのです。

桐子さんにだけ、その話をしました。
彼女は精神科医ですが、私を病院に入れようとはしませんでした。
ただ、
「復讐で男の人から受けた精液が、あなたをだめにする」
とだけ言いました。
私は彼女からもらった、毎日１錠の薬を１５年間欠かさず飲んでいます。
白くて丸いその薬が、安定剤なのか、何なのかわかりませんが、悪い精液を消してくれる、と言いました。
しかし、この一ヶ月飲んでいません。
なぜなら、前にも書いたように、桐子さんが私を避けるようになったからです。
薬もなくなりました。

連絡も取れないようになりました。
私は途方にくれました。
ソウルメイトの彼女がそうなるとは思ってもみませんでした。
昨夜、突然かかってきた電話は、昔のあの不動産会社の女性からで、
Oが死んだと聞かされました。
心臓発作だそうです。
あれから20年もたったいま、Oの死は、少しの戸惑いを、自分に
与えたものの、何も世間を知らなかった幼い自分を、思い出させま
した。
Oの死を今頃聞かされたって、どううしろというのだろう。
私は胸にちくりと刺さった何かを抜くために、ビールを飲みました。
その時とどめを刺すように、遠くにいる父の声がはっきり聞こえま
した。
「あんなには好かれていたのに、まだわからんのか、馬鹿チンコ！」
体が震えました。
馬鹿チンコという言葉が、いかにも父らしく、頭の中で、その言葉
だけがリフレインしました。
原因は、ビールだな。
私は、くすっと笑いました。
寂しくて、悲しくて、怖くて、切ない、そんな夜でした。
Oと結婚していたら、今、どうしているのでしょう。
魔の3年間は、私の人生になかっただろう。
Oとは縁がなかったのです。
私はせめてもと思い、自室にこもり、祈りの準備をしました。
しかし、今日は波が来ない。
ああ、ビールをのんだせいだ。
お酒を飲んで、お祈りする馬鹿はいない。
私は横になって考え事をしました。
桐子さんが何を考えているのか。
よく考えると、原因は中田君のことではないような気がしてきまし

た。
６の世界から、０．０１次元の違う世界に入ってしまった私は、桐子さんとは、もうソウルメイトではないのでしょうか。
夫より、私をよく知っている桐子さん
全世界から、はじきだされたように孤独に陥った私は、久しぶりに泣いてしまうところでした。
涙が目にあふれかけた時、夫ともう一人、そうだ、中田君が家の中に入ってきた。
「ただいま、中田も来たよ」
私はどきりとしました。
夫は私を受け入れてくれる絶対的な存在ですが、中田君は特別です。
中学の頃、同級生の女の子は、必ず、中田君に恋をしました。
私のどきりは、夫には内緒にしています。
夫の親友。
それ以上でも、それ以下でもない。
私はテーブルの上に、２人の飲み物とおつまみを出しました。
酔っているのを悟られぬように、コップを持つ手が誤って、震えたりしないように気をつけました。
夫と中田君は、違う仕事をしていますが、年に２，３回　こうやって、我が家で酒を飲むのです。
中田君は、結婚していない。
仕事で、中国や韓国に、しょっちゅう行っているらしい。
女にはもてるから、彼女の１人や２人いるはずです。
「さおりもここに座ったら」
と夫が行ったので、私もエプロンをはずして、話の輪に加わりました。
桐子さんの話をしてみようか。
何せ、２人は、中学時代、恋仲だったんだから。
「三枝さんを覚えてる？」
桐子さんの苗字だ。

中田君は、少し戸惑った様子で、ビールを飲む手を止めた。
「彼女、今どうしているの」
逆に聞いてきた。何も知らないのか。そうだね。
「いや、最近連絡がないものだから」
「へーえ」
中田君は、端正な顔立ちで、私を見ながら、豚肉の紫蘇まきを食べました。
私は少しホッとした。
もしかしたら、もう、あの薬を飲まなくていいってことかもしれない。
１５年間、私は薬と引き換えに、贖罪したのだ。
神様がもういいよ、と言ってくれた気がして、私は、２人の馬鹿話に加わって笑いました。

3．　５の世界に行った友

中田君が帰った家の中は静まり返った。私は音が嫌いなので、静寂を好んだ。
夫がそばに来て、私の髪をなでた。
「疲れただろう。何かあったのか。少し目が潤んでいる」
私はそんな夫が好きだ。そっと静かに見守っていてくれる。
さりげなさがとてもいい。人を愛すると言うことは、こんな静かなことなのだ。
体なんていらない。静寂と少しの思いやりは、私が一番安心する本物の愛の匂いがする。
Ｏではいけなかった。
誰でもいけなかった。
私の愛は、吉塚君にだけある。

薬を飲まなくなって、一ヶ月が過ぎた。桐子さんからの連絡は一切ない。こちらからも電話する気にもならなかった。
迷惑なの、もうかけてこないで。
この前の電話の桐子さんの声は、そう言っていた。
私は忘れることにしました。

０．０１次元の違う世界に入り込んだ私には、おかしなことが時々起こるのだが、桐子さんのこともその一つなのだろう。
６の世界には、戻れないのだろうか。いや、もしかして、贖罪の１５年が過ぎたから、元の世界に戻れたのかもしれない。
私はこの世界が、６の世界なのか、０．０１次元がずれていないか、いろんなところで試してみた。よくわからない。
そんな時、道を歩いていたら、植え込みの中から、シルバーの１０センチほどの物体が飛び出してきた。

私は、またかという感じで、それを拾いました。
手にとって、まじまじと見たが、ただの金属片です。
ＲＥＭＥＭＢＥＲ．Ｎ．Ｋ
そう刻印されていた。私は立ち止まって動けなくなった。体中に汗をかいた。
私はそれを植え込みの中めがけて、投げ込んだ。
そして走り出した。
桐子さん、桐子さん、教えて。
どうしたらいいの私？
どうなっちゃうの私？
どうして私を避けるの？

私は夢中で桐子さんの病院へ向かっていました。
１時間ほどバスに揺られて、そこに着いた。
大きくて、すごく古い。
昭和初期の雰囲気のする病院。
受付の人に、三枝先生は、と尋ねた。
眼鏡をかけた若い受付の人は、
「あちらの世界に行かれました」
「えっ？」
私は言葉を失った。
もしかして、もしかして、桐子さんは、５の世界に行ってしまったのか。
ちょっと待って、何があったの。
私は家に帰って、頭を冷やした。やはり桐子さんは私のソウルメイトだった。しかも、私より進んでいる。
もう５の世界に行ってしまったとは。
電話しなくては。
私はそう思った。
桐子さんの家のダイアルを押した。

「あ、久しぶり、元気？」
桐子さんだ。
今日はえらく機嫌がいいなぁ。薬のことを聞いてみようか。
ちょっと待って。この桐子さんは、６の世界の桐子さんだ。
本当の桐子さんは、５の世界にいる。この人に聞いても無駄だ。
私は、最近見た映画の話をした。桐子さんも、楽しく話してくれる。
子供の学校について、悩んでいると、昔のように話してくれた。
私はわかっていたから、何も言わなかった。
私達はソウルメイト。私も５の世界に行くんだ。桐子さんが、ずっと前から、精神世界や、神秘世界や神道やヒーリングや、いろんなことをやっていると聞いていた。
そうか、やっぱり私のソウルメイトの桐子さんは、私の先を行ってしまったのか。
５の世界。
どうすればそこへ行けるの？

私は、０．０１次元の違う世界に入り込んだ。
ＲＥＭＥＭＢＥＲ．Ｎ．Ｋ
それがあの日を意味している。私は、ずれちゃったんだ。
どうすればいいの、桐子さん。
また自室にこもって、いつもより念入りに般若心経をとなえました。
キーンという頭の中で、音が鳴り、何かに押さえつけられているような、脳の中に意識が入り込んでくるのがわかった。

目が覚めた時、夫の腕の中にいた。
「帰ってたの？私、どうしたのかしら」
「自分の部屋で眠っていたよ。ここに運んだんだ」
「私お祈りしてて、倒れたみたい」
「あんまり、暗い部屋にこもるのは、やめたら？」
「ただ・・・桐子さんが」

「中田が言ってたけど、あいつんち、変わってるって」
「へえ、どんなふうに」
「聞いても教えてくれないんだ。桐子のこと好きだったのは、あいつのほうなのに、今じゃ、滅茶苦茶言ってる」
「そうなんだ、知らなかった。５の世界にね」
「えっ？本の読みすぎだよ」
夫と私は、隣り合って眠った。
温かい。
体を触れなくても、温かい。私を理解してくれる大切な人。
５の世界のことは、明日考えよう。
「シェルタリングスカイ」というＤＶＤを観た。ラストシーンが近づいて、激しく怖くなったので、そこで止めてしまった。だからラストシーンを観ていない。
こんなに体が震えた映画は初めてだ。私は、イルカの鳴き声の入ったヒーリングミュージックをヘッドホンで聴いて、心と頭を落ち着かせた。
なんであんな映画を作らなきゃいけないんだ。どこでフィルムを止めるかが、ＣＩＡのテストになっているんじゃないだろうか。
最後まで見てしまう人は、普通じゃない。
止めなきゃいけない。そういう映画だ。
私は、このＤＶＤを観てから、５の世界に行くのをあきらめようとした。
何事も、寸でで止めておいたほうがいいような気がする。
過ぎたるは、及ばざるが如し。
それに私は、０．０１次元がずれている。

６の世界とも、５の世界とも違う。このずれが直せるとしたら、ＲＥＭＥＭＢＥＲ．Ｎ．Ｋだろう。
リサ・ランドール博士の５次元の世界というテレビが昔あった。科学のことは、さっぱりわからないが、この人の誕生日を知って驚い

た。６月１８日だと。
また、１９９９年に発表した論文で、物理学会で一躍注目を浴びた、という１９９９年のことが気にかかった。
私は、６の世界や５の世界というものは、科学とは違う地球人の精神密度の発達段階のことだと思う。
何年に、５の世界になると決まっているわけではなく、人々の意識の発達に応じて、０の世界に近づいていくのだと思う。今までに、数多くの進化を遂げて、０の世界になるまで、そう遠くないはずだ。地球がワープする時、どんなことが起きるのか。想像はつかないが、心のついていけない人は死ぬことになるのかもしれない。
桐子さんとだけは、こういう話をよくした。
桐子さんの受け持つ精神科の患者さんの中には、このことに気づいている人も多いという。
「だからのこの仕事やめられないのよ
そう言って、桐子さんは笑った。
長い髪に、黒縁めがね、美しいロングスカートを翻して、桐子さんは、颯爽と病院の中を歩いた。
夕方のラジオで
「怖かったですか？」
それは私に言われたような気がした。
ああ、怖かったとも。
あの映画が怖くないという人に、お目にかかってみたいものだ。私は、そのＤＶＤをゴミ箱に投げ込んだ。もし、レンタル屋のものだったら、どうしただろうか。
素直に返したかどうか、自信がない。あの映画は、私の鬼門になった。あのシルバーの金属片とともに。

道を歩いていたら、向こうから歩いてきた女性が「怖いよー」と言って、通り過ぎた。
何だろう。

私のことだろうか。それともあの映画のことだろうか。その言葉は、未来を暗示していた。夜中に、天井を棒のようなもので、叩く音が一晩中していた。
ここは一軒家だ。マンションじゃない。明かりをつけてみた。夜中の３時だ。部屋を見渡した。カーテンや壁に、マジックで落書きがされていた。わけのわからない模様、言葉。

私は、０．０１次元の違う世界にいる。そう自分に言い聞かせて、電気を消して眠った。

4．卵子

夫が仕事に行った後、子供のいない主婦４４歳にとっては、時間を持て余すくらい退屈だ
スーパーに買い物に行く以外、外には出ない
私はあの状態を求めて、暗くした自室にこもって、よく瞑想した。
キーンという感覚は、日ごとに強くなってきた。
それと共に、仏壇の横の壁に、サイババのような影が映るようになった初めてそれを見た時は怖かった。でも今は、見方のような気がして、迷ったときは、その影をじっと見つめた。瞑想が済んで、部屋のカーテンを開けると、そのサイババは消える。
桐子さんに会いたいと願った。
６の世界ではなく、５の世界の桐子さんに。
そこはどんな世界なのですか
どこか５の世界とつながるポイントはないかと、いつもそんなことを考えた。
桐子さんから貰う薬を飲まなくなって、２ヶ月が過ぎた。私には、何の変化もなかった。
時々、ニュースに出てくる北朝鮮報道に、胸がちくりとした。
怖いことがあった。
先日、留守番電話のボタンを押したら、異国のラジオが録音されていた。１分間くらいで切れた。シルバーの金属片のことが頭に浮かんで離れなかった。
何かが起こり始めていた。

０．０１次元のずれた私には、当たり前のことじゃないかと、自分に言い聞かせた。
夜、２階のベランダに出たら、夜空を光の塊がたくさん飛んでいた。
私は祈った。

「地球を救ってください」
私は子供がいないから、世界中の子供達のことが気になるのだ
その夜、びっくりするようなことが起きた。
６の世界の桐子さんから、電話がかかってきたのだ。
「久しぶりに会えないかしら」
桐子さんの声は明るかった。
私は、これは本物の桐子さんじゃないから、正直あまり嬉しくなかった
どうしようかと迷った薬がなくなったことを聞いてみようかと思った。
「あのう、薬のことだけど」
何の話、と聞かれるのを期待した
桐子さんは、笑っていた
「どうしたの」
私が聞くと、おかしくてたまらない様子で、黙っていた。
しばらくして、
「眠れているの？」
そう聞かれて、私は、ええ、と答えた
病院に来て欲しいということだったので、あさって行くことにした。

病院は、来年建て替えられるというニュースを数日前に見たばかりだった
桐子さんは、週に一度外来患者を診る日を持っていた。なかなか評判もいいようで、美しいから、なおさらいいのかもしれない。
しかし、今日会う桐子さんは、本当の桐子さんではなく、６の世界の桐子さんだ。電話のしゃべり方からして、５の世界に行った桐子さんより、なんだか下品な感じがした。
それにして何の用だろう
水曜日の今日は、桐子さんの外来診察の日ではない。
受付で名前を告げると、別室に通された

壁に患者の会などの紙が貼ってあった。椅子は、おんぼろだった。
新しく立て替えられたら、ここも綺麗になるだろう。
１５分くらいして、白衣を着た桐子さんが入ってきた。
一人ではなかった。
もう一人、別の女性が一緒だった。この人も白衣を着ていた。
黒縁眼鏡に、長い髪の美しい桐子さん。
下品な感じはなくて、いつの桐子さんのような気もしてきた。
私の心は複雑だった。
３人で、椅子に座って、桐子さんを中心にして、話をした。
「この１５年、様子を見てきたけれど」
私は息をのんで、桐子さんの口元を見つめた。
「あなたは回復したようね」
それが私には、
「贖罪期間は終わったようね」
に聞こえた
「あなたは子供を欲しがっていたようだけど、この方は、婦人科のお医者様よ」
と隣の小柄でふっくらした女性のほうを向いた。
「調べたところ、あなたほうに問題はないの」
「えっ、いつ何を調べたの？」
私が婦人科というものに行ったのは、ここ１０年以上ないことだ。
子供のことなど、とうにあきらめている。
「自分の卵子を残すつもりはない？」
やっぱり桐子さんは、元の桐子さんじゃない。
桐子さんは、そういう話をする人ではないのだ。
隣の婦人科の医師が口を開いた。
「大石と申します。失礼ですが、４４歳となると、出産にはぎりぎりの年齢です」
だから何だって言うの。
私は子供などいらないわ。

吉塚君と静かで穏やかな暮らしを楽しんでいるのに、いまさら子供なんて。
それにここは精神病院でしょ。
やはり桐子さんは人が違っている。
そして、この人たちの言っていることは、私に卵子を提供しろ、と言っているようにも聞こえる。
私は、ぷつりと切れた
「子供はもういらない。私、帰ります」
そう言って立ち上がった時、桐子さんがポケットから、何かを出した。
そして私の腕にそれを押し付けた
チクッとして。
「何をするの」
と叫んだところまで覚えているが、その後のことは全く覚えていない。

ベッドの上で、目覚めた時、「良くないことが起きた」と直感した
私は、何日間か眠っていて、その間に何かされたのだ。
わかっている。
何で私にこんなことが起きる。
狙いは、私の卵子だったんだ。
桐子さんへの憎しみが湧いた
私は必死に、あの桐子さんは6の世界の人で、本物じゃない、と自分に言い聞かせた。
あの婦人科の医師の大石という女を蹴飛ばしたくなった。
吉塚君が来て初めて、私は5日間も記憶がないことを知って、愕然とした。
桐子さんから電話があって、「疲れているから、4，5日病院で休ませたい」
と聞かされたらしい。

同級生の桐子さんの言葉が、嘘だとも知らず、夫は信じてしまった。仕方ない。桐子さんは私の親友であり、中田君の元恋人だ。信じないわけがない。
看護婦さんから、もう帰っていいですよ、と言われた。
「三枝先生に会わせてください」
と言ったが、学会で留守だという。
私は、ひどいショックを受けた。
桐子さんの変わり方は、ひどすぎる。
５の世界に行って、本当の桐子さんと話がしたい。

私は、家に帰って、お祈りばかりするようになった。
５の世界に行きたい。
それだけ神様に祈った。
夜中に光は飛ばなくなった。壁を叩く音も、部屋の落書きもなくなった。
私は、０．０１次元の違う世界から、元に戻ったのだろうか。
サイババも、現れなくなった。

１ヵ月後、また桐子さんから電話があった
明るい声で、何事もなかったかのように、また病院に来て欲しい、と言った。
もう行くもんか。
あんたなんて大嫌い。
「もう行かないから」私はそう言って、電話を切った。
「そんなにそっけない対応をすることないだろう」
と何も知らない夫が声を上げた。
桐子さんのことは内緒だった。
「桐子は、心配しすぎるの。私は元気なのに」
「で、何て」
「また病院に来なさいって」

「ふーん、それならもう行かなくていい。桐子は、精神病マニアだな。さゆりは違うのに」
「ねっ、もう行かなくていいでしょう」
「うん」
納得したように、夫は新聞を読み始めた。
私には、この人だけいればいい。
いまさら、子供なんて。
ひどいわ、偽者の桐子さん。
私の卵子は、どこでどう使われるか、わからないのよ。
私はその辺の頭はよく働く。私の卵子を使った赤ちゃんが、外国で生まれる、なんてありえない話ではない。

テレビニュースによると、北朝鮮で何かあったらしい。詳しいことはわからないが、内乱状態のようだ。
私は気になったが、わざと気にしないことにした。
こんな時、中田君なら、何か知っているかもしれない。彼は、中国や韓国をよく出入りしている。それなりに人脈もあるのだろう。
ＲＥＭＥＭＢＥＲ．Ｎ．Ｋ
布団に入ってから、その言葉が頭から離れなかった。

5. 殺意

裸の桐子の体の上に、中田が乗っていた。けだるい雰囲気の中、中田は、桐子の乳首をしばらく扱っていた。
「あの馬鹿、・・・私、あの女の関係した男達のこと、全部聞いたのよ。どんな男なのか」
中田は、ふーんと、乳首から手を離し、桐子の体の上から、ゆっくり離れた。
「どうしてあんなに馬鹿なのかしら」
「それは守秘義務でしょ、いいの、言っちゃって」
「あの女、私と間接キスしたって、言ってたんでしょ、馬鹿馬鹿しい」
中田は黙っていた。
確かに、さゆりから聞いた話を桐子に言ったのは、自分だった。
「いいじゃない、昔のことだよ」
桐子は、煙草に火をつけて、一服吸った。
「煙草はやめなさいって」
「中田君は、さゆりのことが好きだったわけ？」
何も言えないよ、これじゃ。
「俺が結婚できないのは、桐子のせいなんだぞ。ちっとは、反省しろよな」
「あー、あの女、うっとおしい。私の仕事にまで、からんでくる」
「だから昔のことだって」
「わかったわよ、じゃあ、今夜泊まっていこう」
「子供は、夫は？」
「土曜の夜は、みんな勝手なの」
「こんなに長くなるとは思わなかった、俺達」
「さゆりの卵子をどうする？」
「ふふふ、守秘義務です。もう日本にはありません」

「恐ろしい世界だな、何が行われているのか」
桐子は、煙草の煙をホーッと吐いて、灰皿に押し付けて消すと、中田の肩のあたりに、顔をうずめた。
「私より、あの女のほうが価値があるなんて、許せない」
中田は、桐子の髪を撫でながら、
「やめとけ、やめとけ」
と二回繰り返した。
シティホテルのベッドサイド。
薄暗いライトの中で、夜は過ぎていく。

５の世界に行くには、祈ることしか道がないように思えた。
私は、毎晩寝る前に、暗い部屋で、般若心経を唱えて、手を合わせて祈った。
部屋に中に、光は飛ばなくなり、夜空を見上げても、光は見えなくなった。
しかし、祈る時の、キーンという意識は、日ごとに強くなっていくのを感じた。
本当の桐子さんに会えますように。
その部分に、祈りの力をこめた。
もちろん、夫が元気でいてくれることも、同じくらい祈った。

私は、０．０１次元の違う世界から、戻ったのだと実感した。不思議なことは起こらなくなった。
何もかも平凡で、平穏で、平和な日々だった。
夫とよくドライブに行ったり、温泉に行ったりした。
よく話をしたし、どんなに気を遣うこともなかった。
私はいい人と結婚したな。心からそう思った。
思う気持ちの強さ加減が、自分にぴったりなのだ。あの３年間も、今日につながっているならば、自分を許そう。そんな気持ちが芽生え始めていた。

家の前に建物が建つので、工事が始まった。少しうるさいが、日々の暮らしは順調だった。
しかし、その騒音は、何かの前触れだったのです。
テレビニュースの北朝鮮報道は、激しさを増しました。いつ戦争が起こるかわからないカウントダウンが始まった。
ＲＥＭＥＭＢＥＲ．Ｎ．Ｋ
あの言葉が、私の胸をチクチク刺した。
いろんな専門家や評論家が、テレビに出て、情勢を語った。
夫は何も知らない。
これは墓場まで持っていかなければならない話だ。

私は、６の世界が本当に５の世界になる日は、北朝鮮が自由になる時のような気がした。目覚めよ、目覚めよ。地球がワープするまで、もう少し。
人々よ、目覚めなさい。
私も夫も、６の世界にいる。
桐子さんだけ、５の世界にいる。
お祈りしても、会える日は来ない。
偽者の桐子さんからの電話は、あれきりない。
工事の音と、北朝鮮報道は、私の心を少しずつ切り取っていくようだった。
私は、パン教室と紅茶教室に通っている。
どこにでもいる４４歳の主婦です。

この出来事が勃発して、私は発狂しかけました。
ある日、封書が届きました。差出人の名前はありません。
中には、一枚の写真が入っていました。赤ちゃんの写真です。黒い髪で、目が青いのです。
可愛い赤ちゃんでした。

それだけしか入っていませんでした。
写真の裏に、ＭＵＭＭＹとだけ書いてありました。
私は、その赤ちゃんが何を意味するのか、すぐにわかりました。
偽者の桐子さんの病院に呼ばれて、一年以上が過ぎました。
わかるでしょう。
女の子です。瞳の大きな。
私は、大声で叫びました。何を叫んだのか覚えていません。
とにかく家中を転がりながら、大声を出しました。
夫は仕事に行って、留守でした。
私がどのくらいショックを受けたか、おわかりでしょう。部屋の中は、砕けたコップやお皿の破片で、滅茶苦茶になりました。
首を吊ろうか、と思いました。
私の卵子が利用されて、赤ちゃんが生まれたのです。
それをこんなに親切で陰険な方法で、誰かが教えてくれたのです。
消印を一目見て、それを投函したのは桐子さんだとわかりました。
病院のある町の消印だったのです。
桐子さんは、５の世界で生きています。
この手紙を投函した６の世界の桐子さんは、本来はいなくてもいいはずです。
私は生まれて初めて、本物の殺意を感じました。
あの桐子さんは、今、病院にいるはずです。
１時間もあれば行けます。
私は、台所から、包丁を持ってきて、テーブルの上に置きました。
そして、それをじっと見つめました。
仏壇の横に、サイババの姿が映っているのに、気づきました。
花の匂いがしました。何の花でしょう。
電話台の上においている私達の結婚式の写真を見て、私はワッと泣きました。
涙はとめどなくあふれ出ました。
私が殺人など犯したら、夫に申し訳ありません。

私は、やっと落ち着きました。
しばらく、呆然としていましたが、やっと立ち上がって、包丁を片付けに行きました。自殺なんてできません。

あれはきっと私の卵子を使った子供なのでしょう。
前にも書いたように、私は生殖医療には肯定的です。しかし、現実に、こんな非道な手段がとられるとは思いませんでした。
しかし、いつかこうなる日が、来るような予感はありました。
偽者の桐子さんとは縁を切ります。ええ、とうに切れているのです。

最終話　写真館

その日の夜、なぜこの日なのかわかりませんが、夫がまた中田君を連れてきました。何の準備もしていなかったので、お寿司をとりました。
部屋の中に散らばったガラス片は、片付けておいてよかった。
夫は、中田君が来ると、上機嫌です。
３人で、お寿司を食べながら、ビールを飲みました。
中田君は、北朝鮮のことを知っているのでしょうか。酒の席でする話ではないので、私は黙っていました。
お互いの仕事の話や、中田君のガールフレンドの話などを聞きました。
中田君には、３人のガールフレンドがいるそうです。
あのルックスに、独身ともなれば、女が放っておくわけがありません。
楽しい夜でした。
ビールの空き缶が、転がっていました。
１０時ごろ、中田君が「帰るよ」と言ったとき、中田君の携帯メールの着信音がしました。
それをチラッと見た中田君の顔色が、青ざめたのを私は見逃しませんでした。
何かがあったな、と思いました。
しかし、中田君はいつもと変わらぬ様子で
「また来るから」
と言い残して、帰りました。
夫は、ソファで眠っています。ビールが利いてきたのでしょう。
早く片付けて、お風呂に入ろう。
私は台所で洗い物を始めました。
誰も見ていないテレビで、北朝鮮のことをやっていました。

偽者の桐子さんが、事故で亡くなったのを聞いたのは、次の日です。
私は自分を責めました。
私は、昨日、偽者の桐子さんを殺そうとしました。桐子さんが事故にあったのは、そのせいのような気がして、私は激しく落ち込みました。
６時にお通夜に行くことになっています。
夕方、夫は帰ってくると、言いました。
交通事故だったそうです。桐子さんが運転する車が、猛スピードで走ってきたワゴン車と衝突したそうです。
私は、想念というものは恐ろしいな、と思いました。
しかし、その原因は、桐子さんの出した手紙です。
どう考えたって、桐子さん以外考えられません。
サイババの姿は、今日も見えています。
私は、また暗い部屋で、夫が帰ってくるまで瞑想しました。
この頃、沈黙ほどいいものはないと思います。
音なんて、なくなればいいと思います。
お通夜も、お葬式も無事に終わりました。
中田君の涙をはじめて見ました。
桐子さんと中田君は、もしかして続いていたのかな、と思いました。
昔、中田君と夫と３人で、会ってた頃も、もしかして、２人は続いていたのかもしれません。
私達以上に、桐子さんと中田君の関係は深かったのだと、その時初めて思いました。
桐子さんのご主人は、大学教授で、頭のいい息子さんと娘さんがいます。
彼女は本性を出せていたのでしょうか。その隙間を埋めていたのが、中田君ではなかったのでしょうか。
と言っても、６の世界の桐子さんは亡くなっても、５の世界に行けば会えるのです。私は悲しいふりをしましたが、涙は出ませんでし

た。
いつか5の世界で会おうね。
ソウルメイトの桐子さん。
私は、その日を夢見ています。

桐子さんが亡くなってから、一ヶ月ほどして、同僚だと名乗る草壁先生という精神科医から、ご主人に会いたいと、電話がありました。
まさかあの話はしないだろうね。
草壁医師は、桐子さんと仲が良かったようです。夫と草壁医師は、2人だけで会うことになりました。
日曜日の今日、ある店で、待ち合わせしています。
何の話でしょう。
桐子さんのことでしょうか。

夜、夫は神妙な顔つきで、私に話しかけてきました。
「桐子さんに、いろいろ変なこと言ってたんだって」
私はびっくりしました。
変なことって、何だろう。
「5の世界って何。0．01次元が違うって何。光が見えるって、古代人が見えるって、サイババが現れたって」
「やめて」
私は大声を出しました。
何だ話は私のことだったのです。
「君は、重症のパラノイアだって」
私は黙り込みました。
桐子さんは、死んだ後まで、私を苦しめました。
「何で俺には言わなかったのか」
と夫は責めました。
ソウルメイトだから、それだから話したのに。
「もう桐子さんはいないのよ」

私は夫に向かって言いました。
「今度、草壁医師の診察を受けてきなさい。いい人だったよ」
何ということでしょう。

０．０１次元が違っていたことは私が体験したことなのです。
あれをパラノイアという言葉で、片付けて欲しくないと思います。
光も、古代人も、サイババも、本当に見えたのです。
今は、仏壇の横には、何も見えません。
「お祈りのしすぎじゃないの」
私は怒りが湧いてきて、自室に入って、布団に寝転びました。
ＲＥＭＥＭＢＥＲ．Ｎ．Ｋのことを忘れていました。
あの日から、私の人生は変わったのです。
贖罪の日々は、終わりました。
５の世界になる準備はできています。
あとは、Ｎ．Ｋ次第です。
そこで本物の桐子さんに会えるのが楽しみです。
私か単なるパラノイアかどうか。
私は、あの日を境に起きたことをいろいろ思い出しました。
嘘ではないのです。
現実に起きたことなのです。
精神病院にいる人の言うことは、全部嘘なのでしょうか。
おかしい人なんて、この世にはいないのです。
みんなが少なからず、パラノイアであり、それでバランスを取りながら、生きているのだと思います。
私は、草壁医師に会うつもりはありません。
私は忙しいのです。
ＲＥＭＥＭＢＥＲ．Ｎ．Ｋ
あの国が、早く自由な国になるのを願っています。
そうすれば、５の世界の桐子さんに会えるのですから。
６の世界の桐子さんが死んだのなら、５の世界の桐子さんも消えた

のでしょうか。
そんなわけありません。
心のきれいな人です。
桐子さんに会いたい。
パラノイアと大声で言っているのは誰ですか。

家の前に、写真館が新しくオープンしました。
私は驚きません。
店頭のディスプレイの中に、大きく引き伸ばした赤ちゃんの写真が、
たくさん飾ってあります。
どの赤ちゃんも、目が大きいのです。
嘘ではないのです。
この写真館が証拠です。
こうなったのも、あの日が原因なのです。
パラノイアをまだ信じますか。

終わり

最終話　写真館（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました。
ちょっとわかりにくかったかもしれませんが、私の頭の中を整理して、書きました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5663u/

5.99の世界

2011年7月29日00時30分発行